

生活への関わりをたくましく広げる子供を育成する生活単元学習の構想

1 生活単元学習(特支)における目指す姿

- 目的意識をもって、友達と協働しながら、自ら進んで活動に取り組む姿 (自発性)
- 各教科等で学んだことや、生活経験で得たことを生かしながら課題解決をしていく姿 (自己発揮性)
- 自分達で活動をやり遂げたことへの満足感を味わう姿 (成就性)

具体的に目指す姿は、生活場面に近い状況において、子供たちが目的意識を強くもち、その達成に向けて各教科等で学んだことや生活経験で得たことを生かして働きかけることで、やり遂げた満足感を味わう経験を重ねていく姿である。つまり、本研究における生活単元学習は、3つの資質・能力を単元の中でくり返し発揮することで、目指す姿を具現化できる指導の形態であると考えられる。

2 生活単元学習の真正な学び

特別支援学校学習指導要領解説各教科等編において、「生活単元学習は、(中略)自立や社会参加のために必要な事柄を実際・総合的に学習するものである。」と示されている。つまり子供の生活に即し、将来につながる事柄を学ぶことが重要であり、本研究における真正な学びにもつながる。そこで、生活単元学習の真正な学びの条件を以下の2点に設定する。

- ① 目的意識をもち続け、その達成に向けてくり返し挑戦できること
- ② くり返しの中で、将来につながる基礎的な技能を含む、教科の学びを発揮することができること

将来につながる学びには、「1年生が喜ぶ歓迎会を企画する」のように、目的の達成に向けて取り組む力と、各教科や日常で学んできたことを生かした技能的な力を発揮することの両面が大切であると考えられる。

そこで①では、相手(目的)のために取り組む姿を目指す。具体的には、相手の立場に立ち、考えたり、行動したりすることである。相手は、子供にとって身近な目的意識であり、これからの社会を生きる子供達にとって将来の生活に必要な学びであると考えられる。

②では、基礎的な技能と教科の学びを発揮できるよう、繰り返し「つくる」姿を目指す。例えば、小物を製作したり、お菓子を作りに取り組んだりすることである。「つくる」という活動は子供にとって基礎的な技能が必要であり、「手順を読む(国語)」「材料を数える(算数)」など、各教科等の学びを発揮する必要がある。また、作った物を相手に渡したり、販売したりする姿は、将来の職業や余暇活動にもつながると考える。

3 具体的方途

【少しずつ変化させながらくり返していく単元構成】

(1) 目的意識を持続させたり発展させたりするためのくり返し単元を通して、「相手が喜ぶ〇〇を作る」という目的意識を持続させたり発展させたりするために、対象が変わりながら喜びを味わう経験をくり返すことができるようにする。そこで、まずは、対象を「自分」とし、どのようにすると相手が喜ぶことができるのかを知る。次に「自分以外の相手」へと、作る対象を変化させ、「相手が喜ぶ〇〇を作る」という目的意識を持続できるようにする。また、「対象」を、「自分」「試作のための身近な教員」「最終目的の保護者」のように、複数設定することで、目的意識が発展するように単元を構成する。

(2) 基礎的な技能に関わる各教科等の学びを発揮するためのくり返し

お菓子作りの基礎的な技能に関わる各教科等の学びを発揮させるために、少しずつ活動や支援を変化させながら、以下の2つをくり返すことができるようにする。1つは年間を通して、「つくるもの」「材料」「道具」等を変化させ、「つくる」活動をくり返すことである。例えばお菓子作りであれば、初めは、道具や材料が3つ程の簡単なお菓子作りから始め、少しずつ、道具や材料が増える単元をカリキュラムの中に位置付けていく(表1)。

【表1 1年間のお菓子作りのカリキュラム】

	4月	6月	9月	11月
つくるもの	パフェ	おにぎり	おだんご	カップケーキ
材料	牛乳、もと、チョコレート	お米、のり、ふりかけ	2種類の粉、餡子、チョコレート、シロップ	粉、牛乳、砂糖、油、卵
道具	ボウル、スプーン、計量カップ	ボウル、お米の計量カップ、しゃもじ、炊飯器	ボウル、スプーン、鍋、ざる、おたま、キッチンスケール	ボウル、スプーン、あわだてき、計量カップ、オーブン
主な活動	・量る ・かき混ぜる ・こぼさずに入れる ・等分する ・トッピングする。	・量る ・洗う(かき混ぜながら) ・炊飯器で炊く ・つく ・にぎる ・トッピングする。	・量る ・混ぜ合わせる ・こぼさずに入れる ・丸める ・ゆでる ・ひやす ・トッピングする	・量る ・かき混ぜる ・こぼさずに入れる ・卵を割る ・等分する ・焼く ・トッピングする

2つは、単元の熱中段階において、材料、工程、支援を少しずつ変化させながら、同じお菓子作りをくり返す活動である。そのようにすることで、基礎的なお菓子作りの技能や、各教科等の学びを発揮することができる。また、将来的に実生活に生かされるお菓子作りにしていくために、くり返しの中で高まった技能や教科の学びを生かし、少しずつ支援を減らしても、自分で調理ができるようにする。そのようにすることで、家庭にある道具や材料を使い、自分でお菓子を作るという将来の自立につながる学びが展開されると考える。

具体的な実践事例 第5・6学年梅組

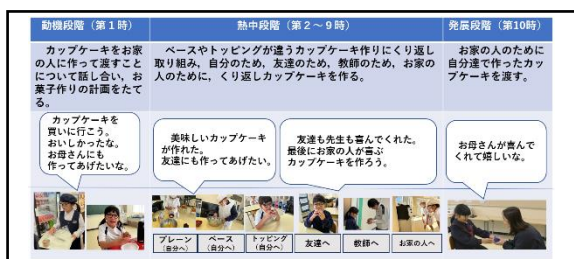
「お家の人がよろこぶカップケーキをつくろう」

本単元の指導案については本研究紀要 58, 59 ページに記載している。

1 授業の実践

本学級の子供たちは、年間を通してお菓子作りに取り組んでいる。家庭でのお菓子作りの経験が全くない子供が半数であり、道具の名前や使い方を知らない子供もいた。そこで、4月は材料、道具が3つほどでできる簡単なお菓子作りから始め、身近な材料や道具を少しずつ増やしてきた。また、工程も「こぼさずに入れる」「かきまぜる」など、お菓子作りに関わる基礎的な経験を年間を通してくり返し行っている。

「つくる」経験は年間で4回目である。本単元の具体的な活動の流れは以下の通りである（資料1）。



【資料1 単元全体の活動の流れ】

① 動機段階（第1時）

動機段階では、「お家の人が喜ぶカップケーキを作りたい。」という思いをもつことができるようにすることをねらいとした。そのために、使う道具や材料が少なく、工程が簡単であり、前単元で経験したことを基に、子供ができそうだと思うようなお菓子作りの本を教室に準備し、休み時間に手にとって見ることができる環境を作った。次に、実際に学校近くのお店にカップケーキを買いに行き、食べる活動を設定した。

A児は、お菓子作りの本を見て、「食べたことがある。作ってみたい。」と、発言していた。そして、実際にカップケーキを食べることで、「美味しい。自分も作りたい。」と意欲を高めることができた。作ったものを誰に食べてもらいたいかを教師が尋ねた際、「自分が食べたい。」そして、「お家の人に食べてもらいたい。」という目的意識をもつことができた。

② 熱中段階（第2時～第9時）

熱中段階では、作り方を調べ、レシピを作った後、「自分」「友達」「教師」「お家の人」と、作る相手を変えながら、合計6回カップケーキ作りを行った。また、くり返しの中で、机の上に準備されたカゴから取ってきていた道具や材料を、実際の家庭にあるような、棚や冷蔵庫の中から取ってくるようにしたり、写真付きの細分化されたレシピを、少しずつ、写真のない文字だけのレシピや、大まかな文章で書かれたレシピで作るように変化させたりした（資料2）。



【資料2 単元を通じた道具・材料・工程の変化】

A児は、友達や教師のために、カップケーキを作り、「おいしい？」と尋ねたり、カップケーキを作った相手が喜んでる姿を見て自分も喜んだりする姿がみられた。また、「ママにあげたい。」と、お家の人にカップケーキを作る事への意欲を高めている発言があり、目的意識を持続・発展している姿がみられた。

また、各教科等の学びでは、第3時、第4時のころは、A児は、手順書に書かれているひらがなやカタカナを1文字ずつ読み、道具や材料置き場に書いていた「おわん」「オリーブオイル」などのヒントカードとマッチングさせながら道具や材料を選んでいった。また、工程を1つずつ教師に確認したり、支援を要求したりすることがあった。しかし、くり返しカップケーキ作りを行う中で、第9時では、写真のヒントや、道具や材料置き場のヒントカードがなくても、棚や冷蔵庫から材料や道具を準備し、ヒントの少ない手順書を読んでカップケーキを作ることができるようになり、各教科の学びを発揮している姿がみられた。

③ 発展段階（第10時）

発展段階では、お家の人にカップケーキを渡し、食べてもらう活動を行った。「私が作ったんだよ。食べていいよ。」と、自分が作ったことをお家の人に嬉しそうに伝える姿がみられた。また、お家の人が「美味しい。」と言っているのを聞いて、笑顔で喜んでる様子から、カップケーキを作って渡したことへの満足感を味わっている姿がみられた。

2 考察

単元を通して、目的意識をもって自らお菓子作りの活動にくり返し取り組む姿は、自発性が発揮された姿であると考えられる。また、くり返しの中で、ひらがなやカタカナを読んだり、書かれている文の通りにお菓子を作ったりしている姿は、自己発揮性が発揮された姿であると考えられる。また、渡した時に見られた活動の満足感を味わっている姿は成就性が発揮された姿であると考えられる。子供の意識に沿って、まずは自分、そして相手へと少しずつ広げながら目的意識をもたせたことが、目的意識を持続・発展させ、くり返しお菓子作りに取り組む姿につながったと考える。また、子供ができそうだと思うお菓子作りを年間や単元を通して工程や支援を少しずつ変化させながらくり返し行ったことで、各教科等の学びを発揮する姿につながったと考える。